



## 共同研究 「アジアにおけるコミュニティの再考」

## 戦後台湾史からナショナル・コミュニティをかんがえる

所員 神奈川大学経営学部教授 泉水 英計

2024年4月19日(金)12028教室

発表: Jonathan Benda (Northeastern University)  
「Formosa's "Borrowed Voice": George H. Kerr's Struggle to Chronicle Taiwan's Postwar Trauma」

コメント: 蘇瑤崇(静宜大学)、吉原ゆかり(筑波大学)

ジョージ・H・カー(1911-1992)は20世紀中葉を生きた米国人歴史家で、台湾と沖縄それぞれについて著作を残している。ベンダ氏の発表は、カーの台湾史の成立過程を丹念に後付け、その歴史的文脈を明らかにするものであった。さらに、同氏は、カーの戦後台湾史『裏切られた台湾(Formosa Betrayed)』が台湾独立運動に与えた影響を詳細に検討し、外国人の著作が、その対象となった人々を動かした稀有な例として論じた。戦後ながら戒厳令下にあった台湾では自由な言論が封じられ、台湾人の意志は、外国人の口を通さなければ語ることができなかった。ベンダ氏発表のタイトル「borrowed voice」とはそのような意味で用いられている。なお、『裏切られた台湾』は1966年に出版されたが、近年、ベンダ氏の序論を付して再版されている。

『裏切られた台湾』は、著者であるカー自身が主要登場人物でもある奇妙な歴史叙述である。というのも、彼は、台湾の戦後史を決定づけた二二八事件の渦中の台北にいたからである。日本が降伏すると中華民国が台湾を接管したが、大陸中国人の施政によって抑圧された台湾人の不満が高まり、1947年2月28日に一斉蜂起として噴出した。国民党は国軍を送りこれを鎮圧したが、その過程で数千人の台湾人が殺害された。カーは当時の台北米副領事であり、この一連の出来事を目撃することになった。彼は米国が介入する必要を訴えたが、蒋介石への支持を堅持する米国政府には届かず、カーは國務省を後にし、学術調査と著述活動に後

半生を送った。

カーの台湾史の最初の草稿は、帰国後すぐに太平洋問題調査会(IPR)の出版企画として準備されたものであった。当初は「台湾と西太平洋の復興(Taiwan and Reconstruction in the Western Pacific)」と題され、主眼は、地域の戦後復興の足場として、日本統治下で発達した台湾の近代的経済インフラを描くことに置かれていた。しかし、戦後史の部分の記述は、著者の政治的立場を強く主張しすぎているという忠告を受ける。IPRのウィリアム・ホランドとの長期にわたる交渉の末に、草稿は、日本統治の開始から日本敗戦までを描いた「日本統治下の美麗島(Formosa under the Japanese, 1895-1945)」へと改稿されたが、IPRから出版されることはなかった(最終的に1974年に *Formosa: Licensed Revolution and the Home Rule Movement* としてハワイ大学から出版)。

一方、切り離された戦後史の方は、当初タイトル「反逆の種(Seeds of Rebellion)」が示すように、国民党の台湾統治に対する批判がより鮮明な叙述へと変じていった。勤務先のワシントン大学では、そのような彼の国民党批判が個人的偏見として問題視され離職を余儀なくされる。彼はスタンフォード大学に転職し、しばらく琉球史の調査事業に没入する(『琉球の歴史(Okinawa: History of an Island People)』1958年)が、1956年にはその職も失い、以後は常勤職には就くことができなかった。非米活動委員会による赤狩りの時代に蒋介石を批判することには大きなリスクが伴っていた。また、当時、問われていたのは、国民党を支持するのか、あるいは、じつは共産党を支持しているのではないかということであって、台湾人の声に関心が向けられることはなかった。そのようななかでもカーは、台湾人の視点に立った台湾戦後史を完成させるべく改稿を続けた。台湾戦後史の執筆が再開されたときのタイトルは「美麗島—分断さ

れた島(Formosa: An Island Divided)」に改められていたが、これが最終的には『裏切られた台湾』として出版された。

この書でのカーの筆致は感情的であり、国民党の台湾統治の失敗を声高に告発していた。党派的に過ぎるという批判は、論敵ばかりでなく、東京で台湾独立運動をしていた廖文毅からもあがった。けれども、カーの告発は、二二八事件後に生れ、箝口令のもとで事件について知らされずに育った若い台湾人独立運動家から熱烈に受け入れられる。彼らの拠点の一つがカンザス州立大学の台湾人留学生会であった。ベンダ氏は、彼らが国民党政権への批判と、それを支援する米国政府への政策転換の要望とを学内情報誌や宣伝活動を通じて活発におこなったことを明らかにしている。そのようななかでカーの『裏切られた台湾』は揺るぎない目撃証言として彼らの活動の拠り所となった。

カーの戦後史を最初に訳出したのもそのような台湾人留学生たちであった。1973年に陳栄成訳『被出売の台湾—二二八事件屠殺台湾人の歴史的見証』が出版されたとき、台湾では禁書に指定され、非合法にしか流通しなかった。その後、台湾政界では民主化運動が急速に進展し、1987年には戒厳令も解除された。1991年に合法的に再刊された陳の訳本は20万部を売り上げるようになった。国民党と共産党が和解に向け歩を進めはじめたとき、如何なる中国であれ再び裏切られないための教訓として本書は再刊された。こう述べた訳者の陳は、台湾人の覚醒により台湾人に属する国家の成立を訴えている。陳の訳本には誤訳も少なくなかったが、2014年に数名の台湾史学者が共同作業により改めて『裏切られた台湾』を訳出し、厳密な校注を付した。このときまでには、二二八事件の検証は大きく進み、鎮圧軍の暴力に対する蒋介石の責任も周知のものとなっていた。しかし、一方で、台湾が中国に併合される可能性はむしろ高まっており、重訳校注版を担った張炎憲は、台湾人が理想と理念を堅持して自らの国家を建立すべきことを呼びかけるための出版であったと述べている。

以上のようなベンダ氏の発表に対し、以下の2名がコメントを述べた。

まず、蘇瑤崇氏が、ベンダ氏の講演内容の背景となる台湾独立運動について紹介した。戒厳令への抵抗運動に拠り所を与えたのが、台湾人には政治的自決権があるという見解をもっとも早く示したカーであった。1990年には台湾人の李登輝が総統になり、台湾は民主主義国家として装いを新たにすることになった。台湾人・中国人意識についての世論調査によれば、1992年に中国人で台湾人であると答えた住民は約42パーセント、中国人と答えたのが約23パーセント、台湾人が18パーセントであった。95年に台湾人と中国人が逆転し、08年には中国人で台湾人という回答数も越えた。23年の調査では、台湾人が62パーセントを占め、中国人は2パーセントまで減少しているという。

つぎに、吉原ゆかり氏が、カーと縁のある人々について紹介した。ドナルド・キーンを日本文学の世界に誘ったのは、コロンビア大学の学友であったカーであった。彼らの親しい学友に、のちにCIAの東京支部を指揮することになるポール・ブルムがいた。ポールの弟のロバートもアジア基金を通して冷戦期米国の日本政策と深い関係があった。アジアで最初のアメリカン・スタディーズ・セミナーが東京大学とスタンフォード大学を拠点にして開始される。その青写真を描いたのがカーであった。また、戦前の台北でのカーの教え子として作家・実業家の邱永漢や、沖縄放送人の川平朝清がいた。このような人脈を糸口にした考察は、冷戦期の日米関係を考えるうえで多くの示唆を与えるという。

その後も、東南アジア華僑へのカーの著作の影響を問うたり、反共主義で結ばれた海外華人ネットワークとの関係を問うたりと、他の参加者からの発言がつづき、活発な質疑応答が終了時間まで続けられた。